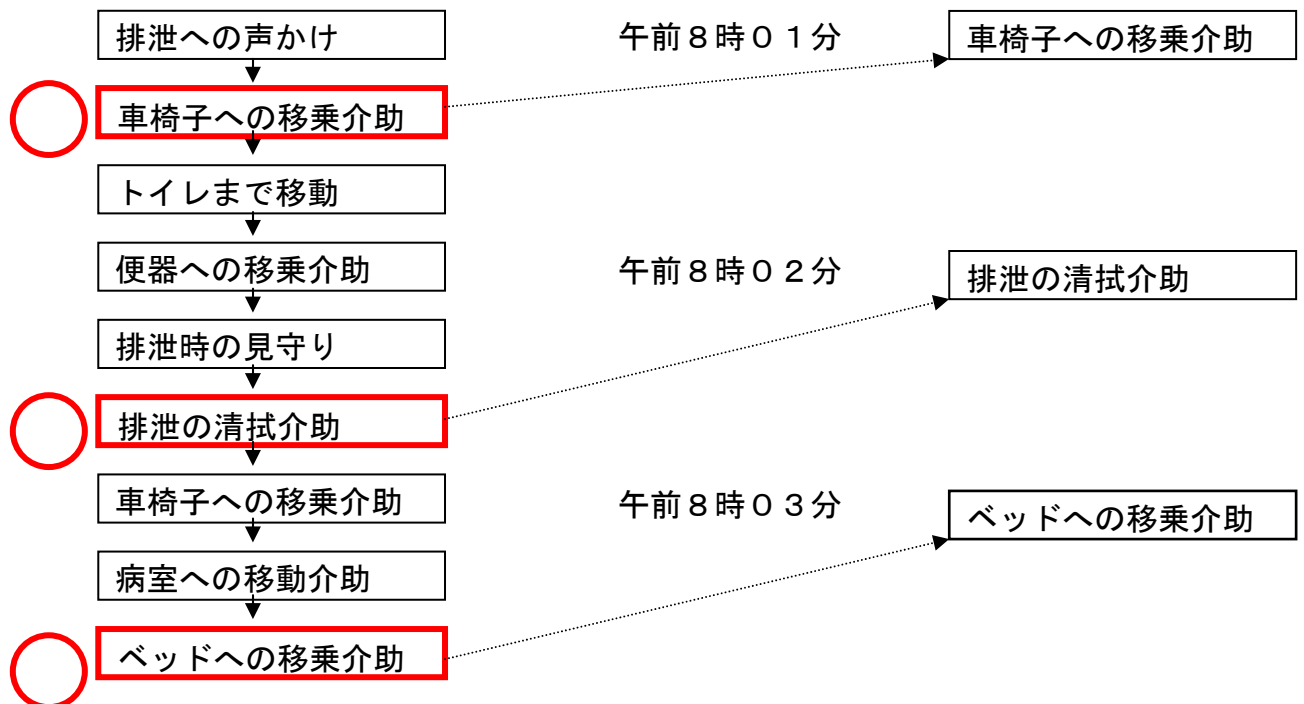


ケアコードについて

(1) 平成7年の調査方法（シーケンスモデル）について

平成7年の高齢者介護実態調査は、1分間で最も重要と判断される介護内容を記載した。

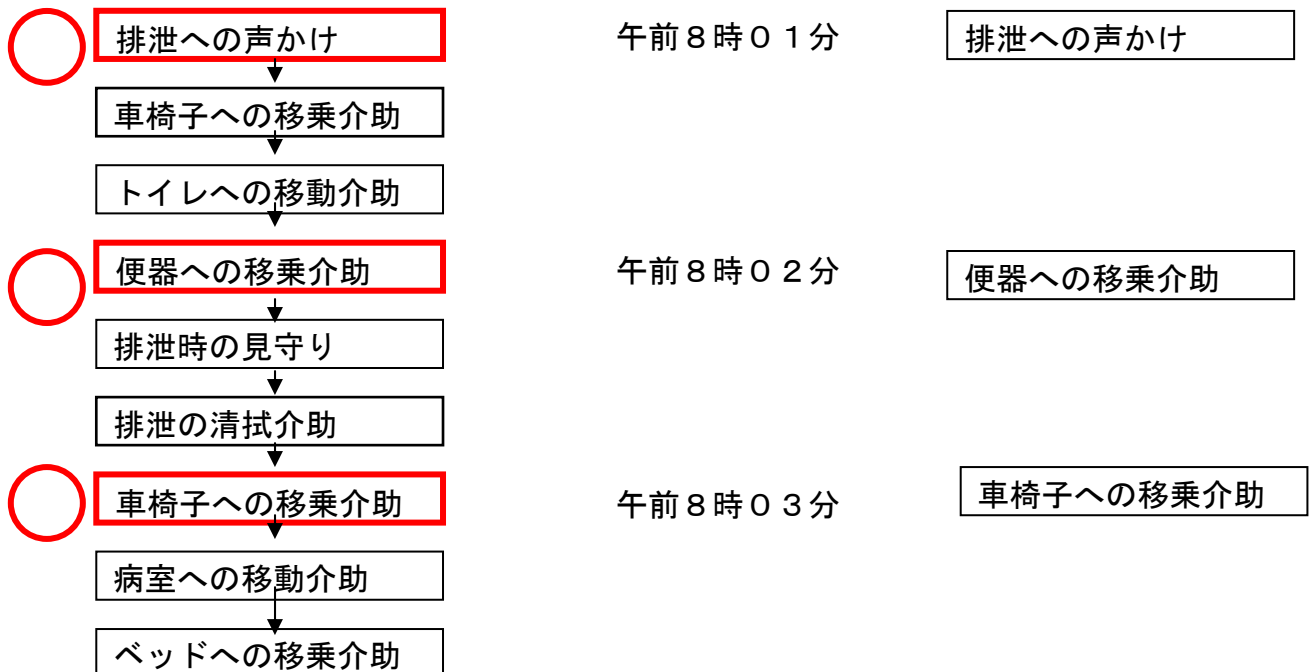
(例)



(2) 平成13年の調査方法（クロックモデル）について

当時、認知症が軽く出るとの指摘があり、原因として、シーケンスモデルでは、直接的な身体介助の比重が高いことが挙げられた。結果として、声かけや間接介助等も拾える様に、「1分間の最も重要な介助」ではなく、「〇〇時△△分の瞬間に行っていた介助」を記載することとなった。

(例)



(3) 今回の調査方法・ケアコードについて

今回の調査方法も、前回実施したクロックモデルを採用することとし、ケアコード（修正案）についても、平成13年版ケアコードを基礎とし、研究班の中で検討してきた在宅・生活自立支援・社会生活支援に係る中分類の項目の拡充を行った。

① 大分類・中分類の数について

大分類・中分類については、平成13年版をベースに、ICF、在宅介護という視点、生活自立支援、社会生活支援等の視点から項目の追加を行った。

(例)平成13年		平成18年
大分類	9	→ 10
中分類	48	→ 64

② 小分類については、第1回検討会において、平成13年版の

(1) 準備

(2) 誘いかけ・拒否時の説明等

(3) 介助

(4) 見守り

(5) 後始末

という5種類のコードを

(1) 直接介助

(2) 間接介助

(3) 言葉による働きかけ

(4) 見守り等

の4つのコードに変更し、調査時の判断を明確にするため、

直接介助・・・要介護者に触れている

間接介助・・・要介護者に触れていない

とする研究班案を提示したところ

(1) これまでの調査と比較し、めが粗くなった

(2) 今回の小分類変更により、一次判定の精度が向上するとい

う根拠に乏しい

(3) むしろ判断しづらいのではないか

との検討会の意見を踏まえ、

○小分類については、平成13年版の

- (1) 準備
- (2) 言葉による働きかけ（誘いかけ・拒否時の説明等）
- (3) 介助
- (4) 見守り等
- (5) 後始末

に戻すこととし、更に、具体的な介護内容をイメージさせるため、「具体的なケアの内容例」の欄を追加した。

過去2回と今回（修正版）のケアコードの比較

		平成7年	平成13年	平成18年
定型的な身体的介助		◎	○	○
間接介助等、その他の介助		△	○	○
在宅・日常生活支援・社会生活支援という視点		△	○	◎
小分類について		具体的なケアの内容を列挙	準備、介助、後始末等5コードに統一	平成13年版に準拠
項目数	大分類	5	9	10
	中分類	58	48	64